

①俺たちの未来

電車を降りて速足に校舎へと向かう。

久しぶりに来た大学は、新緑がいきいきと輝いていた。鳥の声も、虫の声も聴いたのは久しぶりだった。しかし入学当初、初めて来た時は驚いたものだ。良い意味で何もない、いや、自然豊かで穏やかな我が学び舎に。それがはや二年前。

春休みが終わり、緊急事態宣言が明け、さっそく出迎えてくれた新緑に癒された私はとてもワクワクしていた。

春休みから近所の個別指導塾でアルバイトを始めた。基本は生徒の担当制を引いている我が塾だが新米の私に担当はおらず、日によって受け持つ生徒は違った。毎度のことながら初めて担当する生徒に少し緊張し、そんな私の緊張が移ったらしい生徒と徐々にコミュニケーションをとっていくのだが、お互いに様子を伺っていることもしばしばあった。

その日は中学生の国語の担当だった。私は昔から国語が大好きなのだ。よし。と気合を入れて始まった授業。それでもやっぱり慣れない私に、全く臆することなく彼女はよく話し掛けてくれた。とはいえ、その日は授業にならなかった。

「先生の好きな芸能人は誰？」

「好きな歌は何？」

脈絡のない質問にも慣れてきた頃、

「先生の将来の夢は何だったの？」

そういえば私は昔、看護師になりたかった。

幼稚園年長の頃、入院したことがあった。その時担当してくれた優しい看護師さんに、当時の私は子供らしく憧れたのだ。小学校の卒業式では、卒業証書を受け取る前、壇上の上で将来の夢を宣言するのが恒例だった。私は、「困っている人を助ける優しい看護師さんになりたい!」と言った。しかし段々と私は分からなくなっていた。いつからか将来の夢はなくなっていた。

今、その「将来」に私は立っている。

彼女は鞆から一枚のプリントを取り出し、楽しそうに尋ねてきた。

「今日、パソコンの授業でキーボード使って自己紹介書いてん。私の将来の夢は、1警察官、2パティシエ、3看護師、どれやと思う？」

大学では他学科科目も履修できた。私は文系だけど、看護学科の科目も一つ選んだ。実は私も将来の夢は看護師だったよ。塾の壁に貼ってある講師紹介にも書いてあるんだよ。と心の中で呟いた。

飛び乗った電車は出発まであと五分あった。一見空いているけれど座席は全て埋まっていた。満席の車内で私は良さそうな場所を探し歩いた。見つけたのは座席横の手すりだ。ようやく一息ついて、ふと目をやると、落ちているハンカチに気がついた。拾い上げて、近くに座っている女性に声をかけた。

「これ、違いますか？ 落ちていましたよ。」

「あ、違います。」

一瞬集まった車内の視線は、気がつくともう無くなっていた。彼女の少し申し訳なさそうなバツの悪そうな表情が、マスク越しにも伝わってきた。行き場のないハンカチを片手にバツが悪くなったのは、今度は私の方だった。きつと気づいていたけど拾われなかったハンカチ。

出発まであと三分だった。

私は、差し出したままのハンカチをどうすることもできず、目につきやすいように近くの手すりに引っ掛けた。

夕陽の差し込む車内。そういえば私はハンカチをよく拾う。前の人が落としたハンカチを手にとったことが今までも何度かあった。

引っ掛けておいたハンカチをもう一度握り、電車を降りた。

改札方面からホームへ向かう人々とすれ違う。駅のカウンターにたどり着いた私は、ようやく見つけた駅員さんに事情を伝えて、ハンカチを渡した。駅員さんは、虚を突かれたような、疲れているようなそんな感じで

「ありがとうございます。」と言った。

任務完了！一件落着！ホームへ踵を返し、さっきの電車に、

間に合わなかった。じんわりと汗が滲み、マスクのなかではあはあと息をした。

それでも、なんだか爽やかな気持ちになっていた私は少し楽しかった。

次に来た電車は乗客もまばらでとても空いていた。各駅停車だ。

私はゆっくりと腰掛けた。